

椎体骨折状態と世界保健機関(WHO)危険因子による 日本における骨粗鬆症性骨折の予測[§]

Vertebral Fracture Status and the World Health Organization Risk Factors for Predicting Osteoporotic Fracture Risk in Japan

藤原佐枝子 浜谷越郎 後藤若菜 増成直美 古川恭治 福永仁夫
中村利孝 宮内章光 Peiqi Chen

要約

はじめに 椎体骨折は最も頻度の高い骨粗鬆症性骨折で、日本では臨床現場で、既存椎体骨折の有無が日常的に評価されている。この研究の目的は、形態学的脊椎骨折の有無とWHO危険因子を含めて、向こう4年間の骨折リスクを予測する骨粗鬆症性骨折の危険因子を評価することである。

方法 広島住民から選ばれた成人健康調査の男女 2,613 人(平均年齢 65 歳)を、前向きに 4 年間追跡した。既存および新規脊椎骨折は腰椎 X 線の正面と側面像による半定量的方法で判定した。非椎体脆弱性骨折(大腿骨近位部、上腕骨近位部、橈骨遠位端)の情報は 2 年に 1 回の健診において、訓練された看護師と医師によって病歴聴取された。

結果 WHO 危険因子に既存脊椎骨折を加えたモデル(標準偏差当たりのリスク傾斜: GR/SD = 2.73)は、WHO 危険因子のみのモデル(GR/SD = 2.54)よりも将来の骨折をよく予知するようであった。単変量解析において、年齢、骨密度(BMD)、既存臨床骨折と脊椎骨折状態は最もよくリスクを予測した。多発既存椎体骨折あるいは多発非椎体骨折は、有意に骨折リスクを上昇させたが、それらのリスク傾斜に対する寄与は、あるなしの 2 変数として骨折をカテゴリー化した場合と同じであった。この四つの危険因子を考慮したモデルは GR/SD = 2.67 となり、脊椎骨折状態と WHO 危険因子を加えたモデルとほぼ同じ程度に将来の骨折を予測した。

結論 年齢、BMD、既存臨床骨折と脊椎骨折は、WHO ツールに含まれる危険因子を考慮するよりも、より簡単でより正確に将来の骨折を予測した。

[§] 本報告書は *Bone* 49:520–5, 2011 (doi:10.1016/j.bone.2011.05.021) に掲載されたものであり、その正文は同掲載論文のテキスト(英文)である。この日本語要約は、日本の読者の便宜のために放影研が出版社(Elsevier)の許可を得て作成したが、本報告書を引用し、またはその他の方法で使用するときは、同掲載論文のテキスト(英文)によるべきである。